

**パネルディスカッションの部 (総持学園創立80周年
・鶴見大学仏教文化研究所設立10周年記念シンポジ
ウム 瑩山禅と曹洞宗史--新たなアプローチを目指
して)**

雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	10
ページ	85-103
発行年	2005-04
URL	http://doi.org/10.24791/00000453



総持学園創立80周年・鶴見大学仏教文化研究所設立10周年記念シンポジウム

『瑩山禅と曹洞宗史』 〈新たなアプローチを目指して〉

『パネルディスカッションの部』

それでは只今から4人の先生方のご発表を踏まえましてシンポジウムに入らせていただきます。

最初にそれぞれの先生方、発表の中で十分時間がなくて言えなかった部分、またその問題点、他の先生方の発表を聞いて感じたこと等を述べていただきたいと思います。納富先生、何か今回のシンポジウムの全体を通して一言お願いしたいと思います。

〈納富先生〉

今日、雑駁な発表をいたしましたけれども、実は二年前から總持寺祖院のある門前町で、『門前町史』というものを発行しているわけなんです。第二巻目が「總持寺編」ということで總持寺についての重要な史料をそれに収録するという作業をやってきました。今年の三月に出ましたけれども、その際に非常に残念だったのは祖院の史料をほとんどその中に入れることができなかった。それはどうしてかと言いますと、時間的な制限というものがありません。先程もお話がありましたように、祖院のほうには一万点以上、あるいはまだあと一万点ぐらいあるというところから、二万点もある史料を一年やそこらで垣間見るといふことはとてもできないということ。祖院の史料はほとんど入っていないのです。『随喜講』というものが一つ入っているだけで、あとはほとんど現在

總持寺の宝物殿にある史料がその中心になっていてということでございますから、私が今日お話をしたのはその編集をしながらいろいろ学ばせていただきましたことを述べたわけでございます。

それで永光寺と總持寺の関係とあるいは永平寺と興聖寺の関係と、これは似ているのじゃないかと思うのですけれども、總持寺が成立した当初はやはり永光寺のほうで先生のお寺でございますから本寺格であり、總持寺は末寺格ではなかったかどうかと考えます。峨山禪師がたくさんのお弟子を育成されてそれからその門下たちが全国に寺院をつくっていくということからだんだんと總持寺のほうで勢力を増して逆転したということではないかというふうに思います。ただ、永光寺のほうは信仰の道場と言いますか、五老峰がありますから、その五老峰のことを考えますと、信仰の道場であり總持寺は修業の道場であるというふうに考えたらいかかなものかなあと考えたりもしております。あとは、諸先生から一口ずつお話しただいて、また改めて考えさせていただきたいと思っております。

〈圭室先生〉

私はまだ整理をしたただけで中身を細かく分析しているわけではございませんでしたので、かなり勝手なことを申し上げることになったかもしれません。曹洞宗教団を江戸時代中期くらいの本末帳で見えますと、寺数から言いますと、總持寺の末寺が九三％になります。永平寺の末寺が七％でございます。なぜ總持寺の末寺がそんなに多くて永平寺が少ないのかということを読み明かす鍵というのはやはり、先程ちょっと触れましたが、寺社奉行の下に関三刹があつて、関三刹の下に国の僧録を作つて、それが曹洞宗の政治機構を完璧に握つていたということだと思ひます。

しかし、江戸時代の一六五〇年代でございますけれども永平寺のほうで関三刹から交替で、ローテーションで住職にしてしまうということになりますと、果たして總持寺と永平寺と仕分けできるのかどうか、全てが總持寺教団ではなからうかと、そういう感じもするわけでございます。そして結局、先程年表に書きましたようにしばしば總

持寺と永平寺は論争をしておりますけれども、總持寺側の五院の住職がさっきのお話のように七十五日だけトップに上がります。その人と永平寺の住職と対決して、寺社奉行の場で何回かやっておりますけれど、その時は永平寺の住職に対して總持寺の住職は、總持寺の末寺じゃないかというようなやり方をしております。ところが天皇家に一年に一回ご挨拶に行くということや、將軍家にご挨拶に行くというようなことは永平寺のほう格が上で、毎年可能でございます。ところが總持寺のほうは五年に一回とか七年に一回というふうに割り振られておりますし、向こうへ行つたときに座る部屋の位置も永平寺のほうが高くなつていふ、そういういろいろな矛盾がございますので、これから史料を細かく点検していかないと、どっちが上だったのかどっちが勢力があつたのかということ は単純に数字だけでは言えないような気がしているところでございます。以上でございます。

〈廣瀬先生〉

先程かなり時間をオーバーいたしましたので、私にはしゃべる権利はないと思います。ただ、いろいろな曹洞宗のお坊さんが活動いたしましたして、それをいろいろな史料を見ながら掘り起こしていく作業がまだまだ必要だろうと。それからお坊さんだけでなく先程申しましたように、寺の門前の職人さんたちとかそういう方面からの考察が比較的遅れているだろうというふうに思います。

なお、世阿弥の師匠も曹洞宗の大和の補巖寺というお寺の住職でございますし、世阿弥はその影響も強く受けております。それから社会事業なども小さなところでおそらくいろいろなことをやっているだろうと思えますから、そういう掘り起こしに今後も私自身も取り組んでいこうと思っておりますし、必要ではないかなあというふうに感じていふ次第です。

〈伊藤先生〉

私が発表いたしました一番最後のところで、「師檀和合、而親作水魚昵」と言ったところがございます。それが形になったのが輪住ではなかったかというような話をしたのですが、その時、何でそういうふう to 飛躍するのかなと、話した時にはそれで良いと思ったのですが、よく考えますと説明が足らなかったのかなと思います。一番最初に独住モデルと輪住モデルという図を出したのですけれども、独住モデルのほうでは4人の弟子の例を出しましたが、そのうち②の人にだけお寺を譲って他の人には譲らないわけです。そうなるとお寺の住職になった人とならない人、いろいろ思想的な違いがあったり採め事があったり、いざこざがあったり、そういうことがあって分かれていったのかななどと考えるのです。

実際にあったのは永平寺で、永平寺三代目の徹通義介禪師、四代目義演禪師、この時三代争論という争いがあったと言われております。この時義介禪師側に立っていたのが瑩山禪師です。その争いの原因というのが、檀信徒の求めに応じなかった永平寺の義演禪師と、それに対して求めに応じた義介さんのほうが、永平寺を出るという結果になるのです。これを見ていて瑩山禪師は門下の分裂を避け、そして檀信徒への教えを活かしていきたいと。そういう流れのことを今、説明不足だったかなというふうに思いましたので追加させていただきました。そう

これは廣瀬先生の本を読みまして、あ、そうなんだというように考えたのです。補足させていただきました。と思います。

〈司会者〉

どうもありがとうございました。

それでは続きましてそれぞれの先生方が、お互いにいろいろ質問したいこと、発表を聞いて思ったことがおあり

になると思いますので、その辺のところを少し話し合ってみたいと思います。

まず納富先生、他の先生の発表に関して何か質問等がございましたら御願いたします。

〈納富先生〉

質問というよりも、伊藤先生が先程ご発表になりました如意庵というのが、非常に勢力がなかったということ、助住が多かったというお話でございましたけれども、宝物殿のほうには五院の輪住記があるんです。それをご覧になりますと一目瞭然ですね。欠住、欠住、欠住、とあります。そういうことでご覧いただければというふうに思っております。

また、總持寺の宝物殿に所蔵している史料、これは一部分であります。従いまして總持寺の全一的な研究をするためには祖院の史料と併せて考えなければいけないということを書いておきましたけれども、今日の圭室先生のご発表を聞いて一段とそういう感を深めました。以上でございます。

〈圭室先生〉

私は先程申し上げた以上のことは何もございませんけれども、言い漏らしましたのは、「瑞世」という言葉も初めてお聞きの方もありませんが、曹洞宗ではほぼ二十五年くらいの修行をして、なおかつあと五年くらい経って、三十年くらい僧侶になって修行をしますと本山に上りまして権大僧正の位をもらうわけです。普通の宗派で言いますと、それを「瑞世・転衣」と、衣の色が黒から色物に変わりますので「転衣」という言い方をします。その手続きは、本山に行つて一夜住職と言いまして一晩住職になった作法をしまして、京都に行つて勸修寺家からその辞命をもらいます。そうすると瑞世をしたということになりました、住職の位で「東堂」という、本山の住職が終わつたという資格をもらえるわけでございます。

その順番が早ければ早い程、若いうちに取れば取れる程、出世コースが早くなるというわけでございます。ですから、本山に五つの院がございまして、そこにそれぞれ末寺から上がって行ってトップになる場合には、一老、二老というのは資格を取った日にちの早いのが一で、その次が二、三、四、五と、そういうローテーションで上がって参りますので、それを取っていきます。

それが江戸時代の平均で言いますと永平寺がだいたい一年に二二〇人くらい、總持寺が二〇〇人くらい、毎年その資格を与えております。曹洞宗全体のお坊さんの約四〇％はその資格を取っております。ある時期を切ってみますと。あとの六〇％くらいの人たちは、また、それを取りに参ります。それがひとつの活力源になったのだと思います。

もうひとつは先程申し上げましたが、輪住制度ですね。それが七十五日ではございますけれど、本山住職になれるチャンスがあるというわけですね。永平寺の場合にはだいたい六年くらいのローテーションで関三利が替わっていきます。その関三利が替わっていく時に、下の僧録寺院というのが各国単位ぐらいにございますけれど、そのこの住職になった者が関三利の住職になっていって、そして永平寺に上がっていくという、そういう流れがございしますので、そういうものが大きな活力になったのだと思われれます。

それから先程ご説明しましたように、とにかく七年に一回遠忌法要をやります。その時に末寺から勸化金を集めます。そういうものが檀家との関係をさらに強めていったと。そういうものの複合体として曹洞宗教団というのはあるのではないかとというふうに考えております。

〈司会者〉

今、圭室先生がお話になられた瑞世と輪住のことに関しましては期せずして質問用紙にあったわけでございます。

「輪番と瑞世の意味」については、今お答えいただいたことでだいたいおわかりになったと思います。それぞれ地方の寺院から、これは瑞世の場合、一夜ということですが、こういう形で任職になると。それと五院に入って順番に輪番の形で任職になる。それから永平寺に関しては六年ですか、だいたい、そういう形で、変な言い方ですけれども、誰にでも任職になれるチャンスがあるということによって本山に上がってくるという形がとられていたということなのです。

それから「出世の意味をわかりやすく」という質問があつたのですけれども、瑞世と出世というのは明確には言葉の上での違いについてはいかがでしょうか。

〈圭室先生〉

出世という場合には本山任職になつた場合は出世と申しますね。ですから、ただ問題は永平寺の場合と總持寺の場合と、本山任職の場合もちよつと違ひまして、總持寺の場合も紫の衣は着られます。着られますが、永平寺の場合には紫の衣を着ますと、これは『世事見聞録』にあるのですけれども、だいたい今のお金に直すと二億円くらいのお金を天皇家に払わなければならぬ。そういう取り決めがございます。天皇家というだけでなく、全体の費用として払わなければいけないということになります。ですから天皇家と公家ですね、勸修寺家、総取次ぎ、そういう所に払わなければなりませんし、禅師号も貰いますから、禅師号の費用も払わなければならぬ。

そういう意味では出世というものの意味も本山任職として出世するということと、瑞世とイコールの場合の末寺任職が瑞世を取ることでの出世という両方の捉え方があるのではないかと思ひます。

〈司会者〉

この辺りの言葉の使い方というのは、本当に私も時々迷うことがございます。質問には明確にはお答えできな

ったかもしれませんけれども、そういった違いもあったということでもあります。

それでは廣瀬先生、他の先生方のご発表を聞いて何かご質問、ご意見等ございましたらおねがいします。

〈廣瀬先生〉

これは納富先生あるいは伊藤先生だと思いますが、『尽未来際置文』とか、瑩山禅師の文書、『遺墨集』と言うんですかね、ずっと前に写真集で出ておりますけれど、書き込みが結構あるんですよ、行の間に。活字にいたしますと、曹洞宗古文書などはそれもちゃんと起こしてあって、どれがどれだかわからないんですけれども、書き込みについてはどういうふうにお考えになりますか。活字になっていきますと同じように入っているものですか、それで私もかつて漏誤を書いてしまったかなというところがございます。

今、總持寺さんの方にあります瑩山禅師の關係のものとか、峨山禅師とかその辺のものはいかがかなあという気がするんですけども。『置文』は、永光寺ですか。

〈納富先生〉

『置文』は、永光寺ですから私もよく細かに見ておりません。そういうことでお答えできないんですけども、この本日配布した資料の内ですべてを付けたものは皆、總持寺にないものです。永光寺にあるものです。そういうことで区分けをするように※を付けておきました。そういうことでございますからこの『置文』なども他の五老峰のものだとかこの辺のものは全部永光寺の史料でございます。従いまして私もよく研究しておりません。

それから先程、紫衣の問題それから一老から五老までというお話があつて、一老のほうが早くに資格を取得した人ということでした。確かにそうですね。五人がいるわけでございますけれども、總持寺で紫衣を着用する場合は、平等になるようにちゃんと振り分けてあるんです。一老から五老まで例えば、一老が元日に着る

と、あるいは涅槃会に着るといふことになりますと二老が仏誕会に着るとか、そういう形ですつと、ある程度平等に榮譽を受けるようになっております。それを一言申し添えておきます。

〈司会者〉

今、文書の関係の指摘があったんですけれども、私も『洞谷記』に関しては専門にはやっていないのですが、古写本とそれから流布本の『洞谷記』との違いの問題ですね。時代が下がってからの問題と、『洞谷記』というのが永光寺を中心にして書かれているという問題です。

これは後で時間があれば質問しようと思っただんですけれども、總持寺と永光寺の関係が逆転するということが伊藤先生のほうからありましたけれども、そこら辺のところでは文書資料、基礎資料の扱い、それから今言われた書き込みなどの問題ももう一度見直してみる必要があるのではないかな、ということを発表を聞きながら、また今の質問を聞いて改めて思いました。

伊藤先生、如何でしょうか。

〈伊藤先生〉

今、尾崎先生が仰ったのですけれども、永光寺の勢力を總持寺が超えていくというようなお話が出たのですけれども、それが一四五〇年頃、一五世紀中盤頃ではないかなというふうには先程申し述べました。永光寺も輪住のお寺ですからたくさん世代を生んでおられます。總持寺も輪住のお寺ですからたくさん世代を生んでおられます。世代の数をグラフにして重ねてみますと、ちょうど一四三〇年頃に總持寺の世代が永光寺の世代数を逆転するんですね。世代が増えるというよりはやはり門下が増えているということ、門下が増えるということは教団の寺院の数もそれに合わせて増えていくということですから、数の面でも増えていく。また、寺領のことも考えてみたの

ですが、永光寺の寺領と總持寺の寺領を比べてみますと、これはちよつとそれから遅れるのかなとおもいますが、一五世紀の後半頃に寺領という経済的な面でも總持寺のほうが超えていくとありますがありましたので、一五世紀中葉頃には永光寺の勢力を總持寺が超えていったのではないかなというふうに考えております。

先程、書き込みということがあったんですけども、私も文書を調べたりするので時々、これは書き込みであるとか、消してあるなど思うのです。『洞谷記』とは違うのですけれども永光寺の『住山記』というものを見たことがあるのですが、ここにはおもしろい記述がありました。今、加賀の大乗寺というのは独住のお寺ということになっております。でもこの永光寺の『住山記』を見ると、大乗寺は輪住だったということがわかるんですね。と言いますのは、大乗寺の三十世だったとか大乗寺の七十世だったとかいう記述が永光寺の『住山記』には残っております。後の人が消したんですけれども、これは一師印証とか宗統復古とかで正しい法系をまつすぐ繋いでいくというところで、そういう余計な記述は消していくというか、さらに足りないものは加えていくとか、後世の人がやったことがあるのかなと思います。ですから、『尽未来際置文』など、原本を見る機会がありましたら、どういふものなのか詳しく見てみたいと思います。

〈司会者〉

どうもありがとうございます。

時間もございませんので、私からの質問は省きまして、会場からの質問を紹介させていただき、お答えいただきます。と思います。

基本的なことかもしれませんけれども、道正庵についての質問があったのです。「道正庵というのは今でも残っていますか」と。そして、「道正庵についての簡単な説明と、実際にそちらのお寺に行ってみたい」という、ご質

問の意図はそのようなことだと思うのですが。道正庵についてお話しただけですか。

〈廣瀬先生〉

木下家と言います。木下道正庵ということですが、木下家はございます。ただ、屋敷地は非常に狭まっておりますが、今も地名は道正町という町と木下町という町がございますので、かなりその面積は、かつては広かったんだろうというふうに思います。現在もあります。文書は永平寺のほうに大体ありまして、祖院さんにもあるようございます。大部分が永平寺に今預けてありますけれども、系図とかそういうその家にとって貴重なものは今木下さんがお持ちです。

〈圭室先生〉

若干補足しますと、道正庵の系図によりますと、これは江戸時代の系図ですけれども、道元禅師と一緒に木下道正は中国にわたって、道元禅師は禅宗の勉強をして、木下道正は薬の勉強をした、漢方薬の勉強をしたということなんです。そして中国で道元禅師と道正は約束をして、「日本に帰って曹洞宗の宗勢を展開したならば必ず道正の薬を使う」と、そういう盟約をしたということになっております。が、事実ではないだろうと思うんです。これの研究は廣瀬先生がやっておられるんですけれども、どうやら薩摩の福昌寺の仲介で總持寺あるいは永平寺、つまり曹洞宗との繋がりというものが出来上がっていったのだおもわれます。

江戸時代には木下道正が、今で言いますと瑞世をやるお坊さんが本山で住職の儀式をやって、京都へ来てもどこに勧修寺家があるかわかりません。そこでとにかく木下道正庵に行くと代書人的な役割、ほとんど全てのことを木下道正がやってくれるわけですね。それで皆が、瑞世の資格を取れる。その反対給付として木下道正は――歴代木下ですけれども――曹洞宗の寺を通じてのネットワークとして解毒円を売り込んでいく。先程の史料にもありましたよ

うに、一四二人の営業マンというのが曹洞宗の末寺をくまなく回って歩きます。私の家の寺は九州の熊本ですけれども、その辺には同じ人がずっとやって来て、富山の薬売りの人がやって来たのと同じように寺を単位に販売を行いました。新潟の史料ですと、寺が斡旋して今度は庄屋の家へ行つて、村も自分の支配にするという、そういう役割も果たしております。

〈司会者〉

どうもありがとうございました。

それでは廣瀬先生に質問ですけれども、発表の後半に絵解きというお話を一言仰られたと思いますが、絵解き史料について、その行っている地域でありますとか、分量、こういった内容であったのか、そういうことについて一言お願いします。

〈廣瀬先生〉

私は研究しておりませんが国文のほうの方で研究をやっている方がいらつしゃいまして、どんどんと発掘されているところがあります。私が見ましたのは美濃の今須というところの妙応寺というお寺さんでございます。檀越のお母さんでしょうか、この人がかなり強突張りな人で、年貢を取る時には大きな枡で量って取る。当然年貢を納めるほうは枡が大きいですから、同じ地域でも他よりもたくさん入れなきやいけない。そういうようなかなりひどいことをやっているのですが、御開山の説法によって改心する。そういうような話だったと思います。私は聞いたことはございませんけれども、かつては、おそらく住職が説明をしていくということになったのだらうと思います。

それから越前、福井県の龍澤寺に掛軸があります。御開山梅山間本禪師に關わるもので、子どもの頃は市場の町の近くで泥をこねてお地藏さんを作って遊んでいたとか、そういうような開山にまつわるお話だったと思います。

これも私は聞いたことがないのですが、先代さんぐらまでは説明しながらお説教をするというようなことが伝わっているようでございます。今の住職もやるんでしょうか。

まだまだいろんな所にあるかと思えます。場合によると道元禅師の伝記とかあるいは瑩山禅師の伝記をやっている所があればおもしろいかなあと思うのでございます。そうすると、その時代時代の中でどうということが期待される人間像だったかというところがわかるんだらうと、非常におもしろいかなあと思います。私は研究をしておりませんので、出来たらそういうところにも目を向けていきたいというふうに思っています。

〈司会者〉

それに関しては、江戸期道元禅師の『建搦記図絵』という形で一般に絵で示すようになって、そして瑩山禅師に關しても行われます。ただしこれは江戸の末にならないと出て来ないんですね。宝物殿のほうにも何点か瑩山禅師の絵伝があるんですけれども、これも実際どのような形で流布してそして使われたかということもひとつ課題になるんじゃないかなと思います。瑩山禅師の理想像と、それが流布していく過程というのも興味深いというふうに思いました。

それから圭室先生に、「極めて珍しい史料だと仰いました、『曹洞宗護法会名簿』（明治一八年）の製作の意図、伝来経緯、それから他宗派にそういった例があるのかどうか教えていただければ」、ということでございます。この経緯というものについて、おわかりになる範囲でお願いしたいと思います。

〈圭室先生〉

あまり正確にはわかりませんが、護法会というのを作りまして曹洞宗を盛り立てていこうという動きが出て参ります。そこでお金を集めることになりました、全国の末寺にそれぞれの自分の家の檀家の名前と、その家

の先祖代々の戒名を書き上げさせまして、それを全て集めまして本山で供養をするということを行いました。そしてその資金の用途でわかっておりますのは、ひとつは、現在の曹洞宗の宗務庁の前身ですね、そういう組織を作る。それからもうひとつは駒澤大学を創るにあたっての資本金に充てる。つまり僧侶教育機関としての資本金に充てる。これは駒澤大学と限らないかもしれませんが。そういう趣旨が盛られてはおります。それ以上のことは今ここでは正確にはわかりません。

今現在、私どもはそれぞれのお寺の檀家数がわからないんですよ。私の生まれました寺なども正確な数字を出しませんのでよくわかりません。ところが曹洞宗護法会の記録によりますと確実に檀家数がわかるんです。そういう意味では非常に貴重な史料だと申し上げました。ですからそれを集計すれば当時の全国の曹洞宗の檀家数というのが県単位で全て出せます。そういう意味で貴重な史料だと思いました。

ちょうど道元禅師の遠忌法要の時に永平寺で何を出版したら良いかというご相談を受けましたので、是非それを出版して下さいと。そうすると全国のお寺さんの檀家さんの様子がわかるということをお願いしたら、審議会で否決されました。まずいということ。もう明治のことだから良いんじゃないですかと思うのですけれども。

そういうような史料でございます。ただその時他宗派であっても、金持ちの人が、曹洞宗の本山でやるならばということに加えたお金もございます。私の所は温泉場なんです、一番の金持ちはその温泉宿の人です。檀家ではないんですけどもうちの寺の中に書かれております。そういうことはございます。

〈司会者〉

ありがとうございます。

これはどなたにというわけではないのですけれども、總持寺と永平寺の対抗意識、対立についてです。それから

それが現在まで伝わる宗勢上宗門の、——こちらにいらつしやる方はよくわかると思いますが——、永平寺派、總持寺派という政治機構も二つに分かれているような、そこら辺の経緯、対立の経緯と問題点について、それを歴史上どのように捉えるかということでございます。これは圭室先生も何度か仰っていましたけれども、この辺のことに關してはどのように捉えたらよいのでしょうか。

〈圭室先生〉

私の家は親父までは住職をしておりましたが、私は逃げ出しましたので勝手なことを言つて良いかもしれませんが、永平寺對總持寺というものが決定的になつたのはいろいろございませうけれども、やはり元和元年（二六一五）家康の寺院法度によつて両方が本山として認定されたということが大きいと思ひます。どつちかひとつにしておいてくれればこういう問題は解決できたと思うのですが、二つにしたということです。

その辺の時期には現在曹洞宗の、——例えば總持寺の末寺とか永平寺の末寺に入つてゐる——有力な寺も、この二つの寺の末寺ではなかつたのであります。例えば東北の水沢市に正法寺というお寺があります。これは非常に大きなお寺で末寺もたくさん持つております。これは両本山の下には入つていませでした。ですから簡単に説明しますと、そういう有力な寺、九州の薩摩にあつた福昌寺もそうですし、それから山口の太寧寺もそうです、それから熊本にあります大慈寺——私の家の本寺ですが——こういうようなお寺もみんな下に入つていないんです。

だから簡単に考えていただくと、戦国大名みたいな形で地区地区に曹洞宗の法系をひくお寺があつたと。それを大同團結したのが元和元年の寺院法度だと思ひます。この家康の寺院法度によつて二つを本山にしてしまつて、今度はそれぞれの本山が自分の所の勢力の下にそういうお寺を末寺化していった。ですから、そこでどちらか一つにしておいてくれれば良かったんですね。例えば日蓮宗の場合には本来は京都に十六本山があるんです。身延の久遠

寺などはそれほど大きな勢力ではありませんでした。ところが久遠寺だけを本山として指定したわけです。ですから日蓮宗といえは身延の久遠寺だということになって、末寺を統括出来たわけですが、曹洞宗の場合には複数の本山を家康が認めたというところにそのスタートがあるんじゃないかというふうに思っております。

〈廣瀬先生〉

江戸時代に確立するのは、今圭室先生が仰られたようなことだと思えますけれど、もう中世で、先程私が言いましたように一五〇〇年代にはその対立があります。例えば、永平寺が綸旨をもとめると總持寺も綸旨をもとめる。永平寺が勅額をもとめると總持寺もとめる。勅額だったと思いますが、一四〇〇年代ですかね、永平寺は貰えただけですけれども總持寺は貰えなかったという時もございますけれども、一五〇〇年代になりますと先程言いましたように両方とも出世寺院として朝廷から綸旨を貰って任職になるというようないたようでありません。

曹洞宗の中ではおそらく天皇家から綸旨を貰って任職する資格を得たのは總持寺と永平寺だけだと思います。全国曹洞宗寺院はそこへ連なっていくという形になります。やはり資格をもとめて、下手な戦国大名よりも天皇の綸旨というのは相当の力を持ちますから、それをもとめて繋がっていく。五山の中では天皇から綸旨を貰うのは天竜寺と南禅寺だけです。他は將軍家の口上という御教書だけでございますから、天竜寺と南禅寺は將軍家の御教書と天皇の綸旨を貰えるお寺であります。それから大徳寺と妙心寺がそうです。これは將軍家は関係ありません。五山ではありませんので。

曹洞宗では永平寺と總持寺が天皇の綸旨をもらって、任職の辞令をもらって任職につくという形になっております。臨済の五山の天竜・南禅に匹敵する寺院として、どちらかのお寺に任職するということは、その寺院の前住に

なれるということですから、ずっと集約されていくということになります。そして、徐々に本山化は進んでいったんだろうと思います。ですから、圭室先生はどちらかにするとすっきりして良いというわけですが、歴史上はそうはいかなかったんだろうとおもいます。

おそらく、まず永平寺がございまして、その四代目が瑩山禪師です。その弟子の峨山禪師の門下が全国に広がりましていろいろお寺が出来てくると。そうするとまず總持寺のほうにお参りに来る。それよりも手前に永平寺がありますから、總持寺の四代前の道元禪師が開いたお寺もついでにお参りしていこうというお寺さんが増えていったらうと思います。そうすると總持寺はどんどん栄えていきますけれども、ついでにお参りした親元に当たる永平寺が荒れていたのではちよつとまずいというようなことで、そちらも援助するというような形になって、總持寺も盛り上げるけれども永平寺も盛り上げていくというような形になっていった。そのうちにだんだんと永平寺のほうに力を入れてくる。

圭室先生がいうように全部だいたい總持寺系の寺院でございまして。ですから峨山門派が多いわけですが。その中でも永平寺を中心に応援するお寺さんと總持寺を中心に応援するお寺さんが同じ峨山門派の中でも出てくるというようにあるな事なんだろうと思います。永平寺の器之為璠とか中国地方のお寺さんなどはもちろん峨山門派でありますけれども、永平寺をどちらかというところと盛り上げていくというようにあります。このように、どちらかに偏っていったようなこともございまして、中世を経まして江戸時代へ入ってくるというように形になっていくんだらうと思います。

〈司会者〉

いろいろ他にもご質問がございましてけれども最後にひとつだけおねがします。本日の発表の中で開山の瑩山禪師

の宗風ということで「師檀和合」ということも論じられていたわけですが、現代社会においてその宗風と
いうのをどのように実践していくべきか」という点について、納富先生、最後に一言まとめをお願いします。

〈納富先生〉

甚だ難しい問題を投げかけられまして、ちょっと戸惑っておりますけれども、結局はこの瑩山禪師が仰った『置
文』、これが一番中心になるのではないだろうかと思っております。それで、今日的に考えますと、瑩山禪
師のお師匠さんの徹通義介さんは懷井禪師の依頼を受け中国へ渡って、五山十刹の伽藍図を持ってこられたん
けれども、そういうことが非常に積極的・進歩的な面としてあったのではないかと。そういう徹通義介さんの積極
的・進歩的な気質を瑩山禪師は受けられたであろうと。そういうことが道元禪師の思想を受け継ぎながら、伝承し
ながら、なおかつ時代に則した教化の仕方、そういうものがやはり密教の導入だとか祈祷だとかあるいは葬儀だ
とか、そういうことに繋がっていったのではないだろうかというふうに私なりに考えておりますけれども、いかが
でございますようか。

そういうことで檀家を大事にするということは非常に大事であるということを私は痛切に感じております。以上
でございます。

〈司会者〉

どうもありがとうございました。

大変長時間にわたりましてそれぞれのご講演、そしてシンポジウム、「瑩山禪と曹洞宗史」と題しまして様々な
問題点、新しい史料が出てきたことによるいろいろな問題点、側面が新たに見えてきました。私は個人的には祖院
の史料、こういったものに大変興味を持ちましたし、また、今まで知らなかったいろいろな問題点があきらかに

ったというふうには強く感じております。

このシンポジウムはこの一回で終わるのでなく、今後とも総持学園の源である総持寺を中心といたしまして、瑩山禪、曹洞禪というものを深く探求していききたいと考えております。そして、その導入にこのシンポジウムがなればと切に祈念しております。

どうも皆様本当に長時間にわたりましてありがとうございます。

それでは閉式の言葉を本研究所の主任であります矢島先生より、よろしくお願いいたします。

〈矢島先生〉

どうも皆様、本日はご参集いただきましてありがとうございます。先生方には貴重なご講演、また、ディスカッション等いただきましてありがとうございます。

当研究所ではこれまでも所長の『洞谷記』に関するご研究、あるいは科研費の助成を受けて瑩山禪の歴史的な背景等に関する研究等やって参りましたけれども、またこれからこうした総持寺教団、曹洞宗史の歴史的な研究といったことにも、これも柱のひとつとしてこれから研究活動を続けていきたいと思っております。先生方には今後ともいろいろとお力添えを賜りたいと存じます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

それでは以上をもちまして学園の創立八十周年を記念し、また、研究所の開所十周年を記念いたしましたのシンポジウムを終了させていただきます。

ありがとうございました。